

僕は妹に恋をする

2006(平成18)年11月16日鑑賞(ヘラルド試写室)



監督・脚本＝安藤尋／原作＝青木琴美『僕は妹に恋をする』（小学館刊）／出演＝松本潤／榮倉奈々／平岡祐太／小松彩夏／浅野ゆう子（東芝エンタテインメント配給／2006年日本映画／122分）

……久しぶりに星1つのくだらない映画を観た。原作は青木琴美の人気コミックで、「僕妹」と呼ばれているらしいが、双子の兄妹が本気で愛し合うなどという話がなぜ今どきの10代の女の子の胸を焦がすの……？ テーマも単調、2人だけの会話の長回しシーンのくり返しも単調、途中、何度あくびをしたことか……。

ラストシーンを暗示する冒頭シーンは美しいが……

映画の冒頭、草原で遊んでいる幼い双子の兄妹が登場する。そこで何を思い立ったのか、男の子は草花で小っちゃな指輪をつくり、それを女の子の指に。そして、「僕は君をお嫁さんにする」と宣言！ まあ、幼い頃にはよくある風景で、似たような経験は誰にでもあるのでは……？ この短いシーンがこの映画のテーマを暗示し、かつラストシーンも暗示するものだが……。

こんなのあり……？ その1

何でも省略すればいいものではないと思うのだが、『僕は妹に恋をする』を略した『僕妹』は、青木琴美原作、600万部の大ヒットコミックを映画化したものとのこと。主人公は双子の兄妹結城頼（松本潤）と郁（榮倉奈々）だが、何とその2人が互いを好きになり、まさに「禁断の恋」に悩むというストーリー……。そして、それがなぜか今ドキの10代の少女たちの胸を焦がすらしい。プレスシートにある解説を読むと、実にいろいろとそれらしい講釈をタレているが、どれを

読んでも私には納得できかねるものばかり……。ホントにこんなのあり……？

こんなのあり……？ その2

双子の兄妹は今高校3年生。父親がおらず、母親の咲（浅野ゆう子）1人が育てているようだが、映画では家庭事情の説明は全くなく、ただひたすら2人が「好きだ、好きだ」と言い合う物語ばかり……。原作でも、この2人は同じ部屋で勉強し、同じ部屋にある二段ベッドの上下で寝ているらしいが、それはこの映画でも同じ。そのうえ、プロダクションノートを読むと、「原作において重要な小道具である二段ベッドだが、実写にした場合、高校三年生の兄妹が実生活で使うことにどうしても違和感が生じてしまう。そこで安藤監督は、美術部にオリジナルの二段ベッド製作を依頼。部屋の飾り込みに調和するデザイン、サイズのものを作成し、思い切って窓際ではなく部屋の中央に配置した」とのこと。たしかに、スクリーン上に映る二段ベッドはかなり大きいうえ、上に寝ている頼と下に寝ている郁との間で交わされる会話のシーンが再三あるから、重要な舞台装置。そのうえ、何と双子の兄妹がこのベッドの上で……？

早熟化が進み、性体験年齢がドンドン下がっている今の社会において、高校3年生になった男女が同じ部屋の二段ベッドで寝るなどというのは、それ自体が異常！ 親の顔を見てみたいと思っていたら、それは浅野ゆう子だった……。ちなみにこの母親は、えらく物分かりがよい母親面をしており、夕食の時、「あなたたち彼氏や彼女ができたら連れてきていいのよ」「おいしい食事をごちそうするわ」だって……。一体どんな神経で子供の教育をしているのだろうか？ 教育基本法の改正を議論する以前に、こんな非常識な母親にバツ印をつけなければ……。

何と退屈な長回しの連続か……

安藤尋監督の撮影スタイルには独特のものがあるらしいが、その1つが長回し。スクリーン上に2人の人物だけを登場させ、2人の静かな会話シーンだけの長回しは、今年6月27日に観た黒木和雄監督の『紙屋悦子の青春』（06年）の冒頭シーンが強く印象に残っている。安藤監督のこの作品にも、2人の会話にすべてを委ねた長回しのシーンが再三再四登場する。というよりも、舞台を変え、登場人

物を変え、テーマを変えてのそのシーンのくり返しばかり……？

そこで印象的なのはバックで静かに流れるギターの名曲だが、あまりにも同じパターンが使われると、ええ加減飽きてくるのが当然。ほぼ半分の時間を過ぎてなお同じパターンばかりが続くため、途中何度もあくびをくり返すことに……。

少しは勉強しろよ……

この映画の舞台はほとんどが学校だから、教室のシーンがたくさん出てくるが、勉強しているシーンはゼロで、休み中の教室を映すばかり。おまけに頼は屋上が大好きなようで、休み中はいつも1人屋上でボーとしている。自宅のシーンでも、「売りモノ」の二段ベッドでの兄妹の会話は再三登場するが、机に向かって勉強している姿はゼロ。

別に「大学受験が命」とは言わないが、高校3年生ともなれば、ホレたハレたの話ばかりに右往左往せず、少しは勉強しろよと言いたくなかったのは、私だけ？ コミックに描かれる高校3年生の姿って、ホントにこんなのでいいの……？

長い長いラストシーンにうんざり……

頼と郁の2人はさまざまな悩みを経て、ある結論に達する。郁は、幼い頃の頼の約束をずっと忘れずに心の中に秘めていたが、頼が同じように覚えてくれていたかどうかは不安……。ところが、何と頼もしっかりとその約束を覚えていたが、それがわかったのは、頼が郁にウソをついて、頼に対して交際を申し込んできた楠友華（小松彩夏）とつき合っていたことを告白した後……。

「頼ズレイよ」とすねる郁に対して、やさしく「ゴメン」と謝った頼がそこで提案したのは、再びあの幼い頃の草原に行くこと。もちろん、それには郁も異存はなく、すぐに仲直りした2人は、電車に乗りトンネルを抜けてそこにたどり着いたが、昔の草原は無惨にも失われていた。そこで、頼が提案したのは「ジャンケン」。2人の間でジャンケンがくり返され、そんなゲームが延々とスクリーン上で展開されるが、それをずっと観ているといい加減うんざり……。

「あの時代に戻れない」という当たり前の現実を理解するのに、それだけのことをしなければならぬのか！と思わず2人に対して怒鳴りたくなったほど。

こんな延々と続くクライマックス(?)は、2度とゴメンと思った次第……。

嵐か台風か知らないが……？

団塊世代のおっさんとしては、2人の美女が高校生の制服姿で登場すれば、映画が面白くなくても我慢できるが、男優に対して風当たりはきつくなるもの……？ 郁に好意を持っているため、ある意味で頼のライバルとなる矢野立芳(平岡祐太)は、実は頼の親友。しかし彼は、微妙な距離感を保ちながら頼に対して的確なアドバイスをしており、その演技力のたしかさはここでも立証……？

他方、主人公頼を演ずるのは、『東京タワー』(04年)で寺島しのぶの浮気のお相手をつとめた松本潤だが、彼は人気グループ「嵐」の一員であることは私だって知っている。しかし、残念ながら彼はちょっとした脇役で登場していい格好するには十分な演技力だが、主役を張るのはとてもムリ。ちなみに、プレスシートでは、「撮影現場を訪れた原作者の青木琴美が『私の頭の中にしかいなかったはずの頼がそこにいた』とその佇まいを絶賛し、頼の難しい役どころを繊細に演じきっている」と誉め称えているが、さてそれは本心……？ 嵐か台風か知らないが、映画で主役を張るのであれば、もう少し演技の勉強をしなければ……？

思わずキム・ギドク作品と対比……？

韓国の天才キム・ギドク監督の作品は、私がいつも感激するものばかり。それは、作品ごとに明確なテーマが設定されているうえ、それを表現する手法にインパクトがあり、かつ映像が美しいから。たとえば、ほとんどセリフなしで展開される『うつせみ』(04年)における強烈な主張や、『弓』(05年)における人間の業の深さについての考察を見れば、それが、兄妹の間で好きだ、好きだと言いつつだけの物語とは全くレベルが違うこと明らか……。

私がなぜそんな対比をしたのか、それはこの『僕妹』の映画づくりの手法だけはキム・ギドク監督のそれとよく似ているから。しかし、その内容やレベルは段違いで、キム・ギドク作品は思わず集中してスクリーンに見入るのに対し、こちらはあくびをかみ殺しながら、いつ終わるかナと考えているもの。さて、この映画を観たあなたのご感想は……？

2006(平成18)年11月17日記